

# 歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

平成二十四年二月十八日(第十二回)

(佐藤 紀之)

「甘くない」「無理だ」大人の打ち消せる言葉が子供のやる気蝕む  
屋根の上厚さに挑めどサクサクと日差しの優しさ立春を知る

「志」温め「時代」に流されず自分の「命」を求めて生きよ

春立ちて吐く息白き子の交わす挨拶も今日はずんでいる

グラウンドに雪をまといし椅子二つ誰が座るの？花いちもんめ

「人との出会い」で詠みし四首

息をのみ自らに問う人権の重さに心がそろう教室

立志の子 出会で拓く可能性 熱い語りは親を揺さぶる

とんがった自分を磨け新しき時代は止まらぬ立ち上がれ君

和モダンの趣き込めて 我が住い託せる人と会いし喜び

(佐藤 亮照)

雪すだれ 寺庭装えど かたわらに老木の枝折れるも無情

厳寒の床下にある子ども猫 あたたき春 待ちつつ耐える

(黒沼 貞志)

玄関に所を移して 競い合う 秋明の白と 水引の紅<sup>へに</sup>

リニューアル 花壇と菜園 闊<sup>せめ</sup>きあう 狭さがゆえの 楽しきやりとり

精検を待つ間の長さの 重たさで 隣人目線にふとシンパシー

雪冠ぶる 月山葉山に見守られ 若人競う 食の甲子園

手をとりて 雪道歩んで 微笑<sup>えみ</sup>返し 重ねし年輪 顔に映して

我が声が街に流れてこそばゆし ラジオのトークつながる人の輪

毎年の 行く山の道 頂上<sup>したたか</sup>の 石碑が誘<sup>ひび</sup>う 歴史の舞台

冬空の 薄日に誘われ 初もうで 城址の桜の 蕾のかたさよ

薄口差し ひらひらひらひらと 雪の花 桜狩りへの 想いを馳せる

冬列車 吹雪く山あい 割いて行く 向つ先には フクシマの街

# 歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

(千葉 克明)

学校で収穫したる小松菜の抱えし重さ孫に涙す

豪雪にくずれ落ちたる車庫始末足腰痛みて通院の日々

不意に聞く無沙汰を悔み葬式に黄泉に行く人厳寒の時期